

立花 開

口語詩句投稿サイトの選考委員になつて初めての年間賞でしたが、下半期あたりから短歌の投稿が増え、歌人として大変嬉しく思いました。それぞれの詩形に入る“想いの量”は違います。短歌は“想像より入るが、詰め込もうとする”と溢れる”詩形だと私は感じています。これからも色々な詩形の作品を読ませていただきたいです。

新人賞を受賞した大野氏の作風は、美しさの追求を軸に置いています。この世にある美しさを探し、それを安定したペースで投稿できる技術力と思う。

少年が解き放たれて地図となる

鉛筆を尖らせる／心はまるくなる
など、一つの具体を起点とし詩へ跳躍させる作品が特に巧いと感じる。口語表現の幅広さは、ときに読み手が受け取り切れない・わからないと言われてしまうこともありますが、そういった齟齬も少なく読むことができた。しかし、美しく読みやすい作品は淡くなりやすく、自薦はそれが感じられてもどかしさもあつた。

以前も月間総評で触れたことがあるが、私は大野氏の家族について書いた作品の抑え込まれた激情に心を動かされる。

この母と永遠に生きるために剥く／林檎を三つ買いに行く
耐えきれず湖で泣く／母さんが祖母を母さんと／叫んで
いる

閉じられた箱の中で歪に育つた植物のような激しさがぎつしりと詰まっている。諦念と混ざり合う生命力の強さ、その屈折にのみに集中しており詩の輪郭が濃いのである。作者の軸と思われる“美”や“哀”も大切にしてほしいが、この屈折にもまだ眠っている個性があるのではないだろうか。

藤谷 真実子

命がないから／あんなに／からみあう ケーブル
花の名を／たくさん知つて／いじめつ子

山本 巧

首振れば母星を回す扇風機
爽やかな歩幅に進む車椅子

二日酔いの息のてらてら秋の海

奨励賞については藤谷氏と山本氏に注目した。今後もぜひ多くの作品を読ませていただければと思う。受賞された方々、今回惜しくも賞を逃した方々皆さんに自戒も込めてお伝えしたいことがあります。詩歌はゼロから生まれる芸術です。受賞という結果は嬉しく誇らしいものですが、それゆえ賞に囚われてしまうこともあるかと思います。しかし、受賞はひとつ側面でしかありませんし、何かが約束されるわけでもありません。自分の感受性を信じ、守り続けられるのは作者だけです。今後も、詩歌が皆さん的心に豊かさを与えてくれるものであるよう願います。